中古漢語の副詞接尾辞「復」について

井 上 一 之

〈目　次〉

1.　序
2.　接尾辞「復」の使用概況
3.　接尾辞「復」の形成過程
　3.1　先秦時代の「復」
　3.2　漢代の「復」
4.　接尾辞「復」の使用範囲
　4.1　文語と口語における差異
　4.2　地域的な差異
5.　結　語

1. 序

ここに言う「中古漢語」の時期とは，後漢末から魏晋南北朝時代にかけての約400年間を指す．この時期には，前代までに見られなかった様々な変化が現れるが，なかでも複音節語の増加[(1)]——すなわち，単語の二音節化——は，以後の中国語を方向づけるもっとも重要な現象の一つとして位置づけられる．そして，こうした新語の創出および複合語化にあたって大きな役割を果たしたのが“接辞”であることは，先行諸論のつとに指摘するとおりである．

ところで，接辞，とりわけ接尾辞[(2)]に関して言えば，名詞に後置される接尾辞「子」「児」「頭」や，形容詞に後置される接尾辞「然」「焉」「如」などが広く知られている．しかし，副詞に後置される接尾辞[(3)]に対しては従来，必ずしも十分な注意が払われてこなかった．近年，一部の研究者の間でようやく注目され始めたものの，その来源，機能，使用状況などの点については，いまだ正確かつ詳細な記述がほどこされていないものもある．

本稿では，中古漢語に活発化した副詞接尾辞「復」を取り上げ，こうした機能としてはたらく形態素がどのような規則性のもとに語構成に参画したのかを整理・記述してみたい．またあわせて，それが共時的言語体系のなかでいかなる使用区分および機能をもっているのかを考察してみようと思う．

2. 接尾辞「復」の使用概況

「復」字がある語に軽く添えられるだけで，「また，もういちど」(副詞)といった実義をもたないことにもっとも早く論及したのは，清の劉淇『助字辨略』である．だが本書は，「復」字のもつこの特殊な用法に気づきながらも，それをたんに「語助」と理解するにとどまった．その後，志村良治1967がこれを「～来」「～然」「～経」と同様に，副詞に添えられる接尾辞

の一つと認めるに及び，80年代以後の関連論文[4]では，この「接尾辞」説を支持するものが少なくない．たとえば，近年出版された中国語の語法概説書では次のように説明されている（要約）．

「復」字は本来副詞であるが，後漢時代，少数の「復」字が副詞の後に付着し，「さらに，また」といった実義を表さず，ただ音節を構成する役割を果たすだけとなり，接尾辞に変化した．以後，魏晋南北朝時代に至って，きわめて盛行する．またその使用範囲は広いが，全体の比率から見ると，副詞の接尾辞として用いられることがもっとも多く，ついで連詞の接尾辞となるものがよく見える．さらに，動詞，助動詞，形容詞，時間名詞の接尾辞としても用いられることがある．
（柳士鎮 1992『魏晋南北朝歴史語法』[5]）

「復」字が付着する語の品詞については，論者によって多少の異同が見られる．しかし，主として副詞の後置成分と見なす点で，ほぼ一致していると言ってよい．

では，それは具体的にどのような語（副詞）と結びついて用いられているのだろうか．ここでは，ひとまず『世説新語』を例にとって，その実例を示しておこう．

『世説新語』には，全211例の「復」字が用いられているが，このうち接尾辞の用例と考えられるのは，以下の18種51例[6]である．

(1)　亦復　10例（「排調」4，「軽詆」29，「尤悔」4等）
(2)　皆復　1例（「賞誉」127）
(3)　乃復　12例（「言語」98，「賞誉」23，「規箴」22等）
(4)　便復　1例（「簡傲」6）
(5)　已復　3例（「徳行」2，「方正」58，「排調」4）
(6)　輒復　1例（「簡傲」8）

(7) 時復　2例（「文学」22,「品藻」36）
(8) 故復　2例（「方正」10,「雅量」25）
(9) 誠復　1例（「品藻」82）
(10) 頗復　1例（「傷逝」7）
(11) 聊復　2例（「任誕」4,「排調」37）
(12) 自復　1例（「言語」31）
(13) 豈復　2例（「政事」1,「規箴」1）
(14) 雖復　2例（「方正」6,「容止」16）
(15) 況復　1例（「黜免」4）
(16) 若復　1例（「文学」13）
(17) 当復　6例（「賞誉」51,「品藻」79,「黜免」9等）
(18) 足復　2例（「文学」45,「尤悔」13）

既述のとおり，副詞の後置成分となるものが大半を占めるが，その他に連詞〔(14)(15)(16)〕や助動詞〔(17)(18)〕に付くものも見受けられる．しかも，これらはいずれも「復」本来の意味を表さないばかりか，特定の共通する意味すらもっていない．

嵇，阮，山，劉在竹林酣飲，王戎後往．歩兵曰：「俗物已復来敗人意．」王笑曰：「卿輩意，亦復可敗邪．」

（嵇康，阮籍，山濤，劉伶が竹林で大いに飲んでいた．そこへ王戎が一足おくれてやってくると阮籍が言った．「俗物がもうやってきて雰囲気をぶちこわしやがった．」王は笑って言った．「きみらの雰囲気もぶちこわせるほどのものだったのか．」）　（「排調」4）

「歩兵」と王戎の発話のなかでそれぞれ「復」字が用いられている（これは接尾辞「復」が口語のなかで多用されたことを示唆するものであろう）が，これらが「また，ふたたび」の意味を担っていないことは文脈から明らかであろ

う．

また，「已」（時間副詞＝すでに）と「亦」（範囲副詞＝～もまた）の間には意味的な繋がりがないことから，この後に置かれる二つの「復」字にも共通した意味は見出しにくい．そして，より重要なことは，「已復」「亦復」の語が，第一音節の意義素――すなわち「已」「亦」――と意味的に重複していることである．つまり，この場合，「復」は語中において意味を表さない成分――「虚語素」――として機能していると考えられるわけである．

ところで，こうした後置成分「復」をともなう二音節語の使用は，ひとり『世説新語』に限ったものではない．早くも西晋の陸雲や東晋の王羲之などの書簡文，『三国志』や『宋書』などの史書，及び『搜神記』などの志怪小説類にも認められ，おそらく魏晋南北朝時代には普遍的な言語現象であったと推察される．朱慶之 1992[(7)] では，それが漢訳仏典のなかにも多用されている事実を指摘しているが，その用例を見ると以下のようにきわめて多彩であることが分かる．

「倍復」「並復」「次復」「粗復」「方復」「合復」「或復」「加復」「将復」「竟復」「寧復」「且復」「然復」「若復」「尚復」「設復」「適復」「実復」「遂復」「儻復」「唯復」「為復」「欻復」「悉復」「小復」「続復」「尋復」「因復」「猶復」「願復」「欲復」「則復」「転復」「縦復」

このように，「復」字を後置成分とする二音節語の語群が，かなり広い範囲でまとまって見られること，そしてその用例が固定的・画一的なものではなく，むしろ多種多様であることから考えると，中古漢語の「○復」の語は，――副詞「復」との結合からなる単純な同義複詞ではなく――接尾辞「復」をともなう新しい複合語である，と言えよう．

とすれば，次に問題となるのは，この「復」字がいつ頃，どのようにして副詞（もしくは連詞）と複合化したのか．また，一見恣意的に結合しているように見える，これらの複合語が，どのような規則に基づいて増産されてい

ったのか，という点である．次章において，この問題を考察したい．

3. 接尾辞「復」の形成過程

3.1 先秦時代の「復」

「復」字は，音韻論的に「複」「報」などと同系統の語とされ，「←の方向に来たものを，もう一度→の方向にもどす（藤堂明保『漢字語源辞典』）」を基本義として共有する単語家族に属する．したがって，『説文解字』に「復，往来也」とあるように，「もと来た道を引き返す」という意味をはじめ，「回復」「報復」などのように「すべてをもとの状態にもどす（白川静『字統』）」という意味や，「答復」のように「こたえる」という意味を派生義としてもつことになる．先秦時代の文献では，この動詞としての用法が比較的多い．

一方，复声のことばは，「重複する」という意味を根底に含むことから，のちにこれが虚義化して「重ねてもう一度」「くり返して」の意味を表す副詞としても用いられるようになったとされる．たとえば，『論語』『孟子』には，

子曰：「甚矣，吾衰也．久矣，吾不復夢見周公也．」
（先生が言われた．「ひどいものだね，私の衰えも．久しいことだよ，私が二度と周公を夢に見なくなってから．」）（「述而」5）

公孫丑問曰：「夫子当路於斉，管仲，晏子之功，可復許乎．」
（公孫丑が尋ねて言った．「先生がもし斉の国で要職につかれたら，あの管仲や晏子のような功業をふたたび期待できますか．」）（「公孫丑章句上」）

といった副詞的用法が見えているが，これらはいずれも，「復」字の基本義である「重複・反復」の意を依然有していることが知られよう．

とはいえ，こうした意味・用法はあくまでも基本義であり，必ずしも先秦

時代のすべての文献に適用できるわけではない．たとえば，『論語』『孟子』などの魯方言とは，また別の言語グループに属するとされる『左伝』を披閲してみると，そこにはこの基本義と若干異なる用法が散見する．それは，大きく三つに類別することができる．

まず一つめは，動作の累加を示す用法である．

晋侯使解揚帰匡・戚之田于衛，且復致公聟池之封，自申至于虎牢之境．

（晋侯は解揚に命じて衛から攻め取った匡と戚の土地を衛に返し，さらに公聟池に与えていた，申から虎牢の境に至るまでの土地を鄭に返した．）

（『左伝』文公８）

ここは「晋侯」が，以前衛から攻め取った土地を「解揚」に命じて衛に返したという意味にすぎず，決して同じ土地を二度返したという文脈ではない．つまり，主語「晋侯」は同一動作を反復していないのである．むしろ文脈から考えると，「匡・戚之田」を「帰した」ことに加えて，さらに「公聟池之封」の土地も「致した」ということであろう．したがって，ここの「復」字は，「同一動作の反復」ではなく，「異なる動作・状況の累積」を表していると見ることができる．

二つめは，異なる主語が同様の行為を繰り返すこと――「～は・・・し，また――も・・・した」――を示す用法である．これは，『論語』『孟子』の用例が，同一主語による同一行為の反復――「～はまた・・・した」――を表すのとやや異なっている．たとえば，

宣子盥而撫之曰：「事呉敢不如事主．」猶視．欒懐子曰：「其為未卒事於斉故也乎．」乃復撫乃曰・・・．

（宣子は手をすすいで荀偃の亡骸を撫でながら，「後任の呉に対してあなたと同様にお仕えしないことがございましょうか」と言ったが，それでも荀偃は眼をつぶらない．さらに欒懐子は「斉の討伐を終えないためなのでしょうか」と言って，

そこでかれもまた荀偃の亡骸を撫でて言った.）　（『左伝』襄公19）

とあるが，この場合，「宣子」が「撫」でたうえに，「欒懐子」もまた「撫」でた，という文脈のなかで「復」が用いられていることに注意したい．つまり，行為・事柄は同じであっても，主語が異なっており，これは現代中国語の「也」に相当する用法と考えられる．

そして，三つめは，動作・状態の継続を示す用法である．

公止之，恵伯成之，使仲舎之，公孫敖反之．復成兄弟如初．従之．

（文公は襄仲をやめさせた．恵伯が調停して，襄仲にはこの縁談をあきらめさせ，公孫敖にはこの女子を莒（きょ）に返させた．そこでもとのままの兄弟関係を維持するようにさせた．二人はそれに従った.）　（『左伝』文公７）

前後の文脈から見ると，ここは，「再び兄弟になった」ということではなく，危うく壊れそうになった兄弟関係を昔のままに維持させようとした，という文脈である．とすれば，「復」字は，依然として原状が保持されていること，「なおも，依然として」といった，状態・状況の維持や動作の継続を示すものと考えられよう．

このように見てくると，すでに先秦時代，副詞「復」字は，「繰り返して」という基本義から派生して，①「さらに（動作・状況の累加）」，②「～もまた・・・した（異なる主語による同一動作の反復）」，③「なお（時間的な継続関係）」といった多彩な意味・用法をもっていたことが改めて確認される．そして，こうした副詞「復」の多義的な側面が，「○復」式複合語の生産に関与しているであろうことは，想像に難くない．

もっとも，この時代の副詞「復」の用例を見ると，単独で用いられるのが一般的であり，ほかの副詞・連詞と複合するケースはほとんど見られない．わずかに「又復」（『墨子』「非儒」，『荘子』「応帝王」）のような同義結合による複合語が用いられているが，これも全体の傾向のなかではむしろ例外的なも

のである.

とすれば，先秦時代において，「復」の接尾辞化が起こったと考えるのは，総合的に見てやや無理があると言わざるをえない.「復」を後置成分とする複合語が出現するためには，少なくとも語彙における複音節語の増加が顕著となる漢代をまたねばならないわけである.

3.2　漢代の「復」

漢代に入ると，散文，詩歌ともに「復」字の使用頻度が急増する. なかでも前漢の『史記』の用例数は際立っており，その大部分が副詞的用法である. しかも，さきの『世説新語』に見えていた，「乃復」(31 例)「皆復」(12 例)「亦復」(3 例)「誠復」(2 例) のような，副詞との組み合わせも少なくない.

だが，これらの「復」字を仔細に吟味してみると，そのほとんどが依然単用されているようであり，二音節の複合語であるとは，にわかに断定しがたい.

一方，漢代の詩歌，とりわけ民間歌謡に由来する作品のなかにも，「○復」の語が散見する.

(1)「且復」

長当従此別，且復立斯須.　(「李陵録別詩」其一)

(2)「輒復」

迎問其消息，輒復非郷里.　(蔡琰「悲憤詩」)

(3)「当復」

己得自解免，当復棄児子.　(蔡琰「悲憤詩」)

何能坐愁払鬱，当復待来茲.　(「西門行」)

(4)「豈復」

人言母当去，豈復有還時.　(蔡琰「悲憤詩」)

(5)「又復」

既至家人尽，又復無中外.　（蔡琰「悲憤詩」）

(6)「亦復」

天無涯兮地無辺，我心愁兮亦復然.　（「胡笳十八拍」）

佳雨灌畦稲，陸地亦復周.　（「茅山父老歌」）

(7)「忽復」

白露霑野草，時節忽復易.　（「古詩十九首」其七）

(8)「更復」

露晞明朝更復落，人死一去何時帰.　（「薤露」）

(9)「便復」

阿母為汝求，便復在旦夕.　（「古詩為焦仲卿妻作」）

(10)「幸復」

児已薄祿相，幸復得此婦.　（「古詩為焦仲卿妻作」）

(11)「並復」

投壺対弾碁，博奕並復行.　（「古歌」）

(12)「尚復」

白鹿乃在上林西苑中，射工尚復得白鹿脯.　（「烏生」）

黄鵠摩天極高飛，後宮尚復得烹煮之.　（「烏生」）

このうち，たとえば(8)「更復」は，対句のなかで「何時」と対応して用いられていることから，「更」と「復」の単用というより，「更復」の一語と考える方が自然である．また，(2)「輒復」を前後の文脈から判断すると，意味の中心はあくまでも「輒」にあり，「復」の方は完全に虚義化してしまっている．したがって，これらの「〇復」の形式を少なくとも複合語と見なすことは，まず問題ないであろう．

次に，これらを年代的に見ると，(1)前漢の「李陵録別詩」（「与蘇武詩」）がもっとも早い用例であるが，これについては偽作説もあり，年代を考証するうえでの積極的な資料とはなりえない．ただ，漢代の作品であることは認めてよい[(8)]であろう．そこで，現時点において制作年代がある程度確定できるの

は，(2)(3)(4)(5)蔡琰「悲憤詩」と(9)(10)「古詩為焦仲卿妻作」の二篇に絞られよう．

前者は，『後漢書』巻八十四「列女伝」に収録されているもので，後漢を代表する学者，蔡邕のむすめ，蔡琰（162？～239？）の作．琰は興平2年(195) に南匈奴に捕えられたが，12年後，再び中原に帰り，この詩を作ったとされる．とすれば，この詩は少なくとも建安12年 (207) 以後の作であると言ってよい．

一方，後者は『玉台新詠』に収められているものであるが，そこでは作者を「無名人」としており，詳しいことは分かっていない．ただし，詩の序文に「漢末建安中，廬江府小吏焦仲卿妻劉氏・・・時人傷之，為詩云爾」とあることから，基本的には漢末の人の作と見るのが穏当なようである．

そうして見ると，「○復」式の語が用いられ始めたのは，おそくとも後漢末の，しかも主として楽府系の作品群であった，と言ってほぼ間違いはないであろう．

ところで，ここで注目したいのは，これら「○復」の語の置かれている位置である．(8)「更復」を除いて，いずれも下句に現れており，しかもこの二句は上下あいまって一意をなしている．換言すれば，上句の動作・事柄と下句の動作・事柄をつなぐ位置に「○復」の語が置かれているわけである．

また(8)「更復」にしても，「露晞」という状態と「落」という動作をつなぐ役割を果たしており，二つの状況を接続するという点でかわりはない．

とすれば，接尾辞「復」は，広い意味で二つの行為・事柄を接続する語と複合していると判断されよう．そして，こうした複合化は，もとより「復」本来の意味と無関係ではない．

すでに前節において見たように，副詞「復」の用法は，「同一動作の反復」，「動作の累加」，「異なる主語による同様の動作の反復」，「時間的な継続関係」など，きわめて多岐にわたっているが，これらは広い意味で二つの行為・事柄の接続という機能を中核としている．それゆえ，漢代における複合語化にあたって，「行為・事柄の接続」という意義を紐帯とし，ひとつのま

とまった語群を形成していくのは，比較的容易であったと考えられるのである．

とはいえ，「行為・事柄の接続」という意義だけでは，中古漢語に見える「〇復」の語群すべてを包括しきれないのも事実である．というのは，後の魏晋南北朝時代に至ると「誠復」(『世説新語』)，「頗復」(同)，「実復」(『増一阿含経』)，「殊復」(陸雲「与兄平原書」)，「甚復」(同) といった，形容詞もしくは動詞の前に置かれて，状態・動作の程度を強調するものが見られるからである．

しかし，こうした「復」の用法もけっして突然変異的に出現したわけではない．やや時代が下るが，すでに後漢時代には「復」字が程度を強調する副詞として用いられていたようである．

> 皋陶陳道帝舜之前，浅略未極．禹問難之，浅言復深，略指復分．
>
> (皋陶は舜帝の前で自らの主張を述べたが，あまりに浅薄かつ簡略で十分に意を尽くせなかった．そこで禹がかれに尋ねたことろ，さきほどの浅薄な言辞はさらに深く，粗略な趣意はさらにはっきりした．)　(『論衡』「問孔」)

つまり，「復」字には，「また，もういちど」いう意味とは別に，「さらに，いっそう＝程度の強調」という意味を表す場合があり，これが同じく程度の強調を表す「甚」字などと同義複詞として結びついた可能性は十分考えられる．そして，次には「状態の程度を表す」という，一種の類概念が作用して，後に「誠復」「頗復」といった複合語が生まれていったと見ることができよう．

こうして見ると，「復」を接尾辞とする「〇復」式の語は，一見恣意的・無規則的に結合しているように見えながら，まず「二つの状況の接続」という意義を紐帯として，後漢時代に「輒復」「更復」などの語が生産されはじめ，ついで「動作・状態の程度を表す」という類概念のもとに，魏晋南北朝時代，数多くの程度副詞を増加していったと考えられるのである．

4.　接尾辞「復」の使用範囲

前章において，「〇復」式の語の類推・生産過程について考察してきたが，ここでは，この副詞接尾辞「復」が実際にどのような範囲のなかで用いられたか，という点について考えてみたい．すなわち，文献の性質——文語と口語，南北の地域差——に応じて，その運用になんらかの偏りが認められるかどうか，という問題である．まずは，“文体”（文学様式）による差異の点から見てみよう．

4.1　文語と口語における差異

すでにいくつかの専論が指摘するように，「〇復」の語は，賦，表，序，論のような正統的な文言文よりは，通俗的な書簡文により多く用いられているようである．

実際，『文選』の用例（詩作品を除く）を見ると，「豈復」1例，「亦復」2例，「益復」1例，「輒復」2例，「已復」1例，「況復」1例，「故復」3例，「聊復」2例，「猶復」3例，「当復」2例，「雖復」3例となっており，全体的な数量から判断してさほど多いとは言えない．

これに対して，西晋の陸雲の「与兄平原書」や，東晋の王羲之，王献之の「雑帖」などの書簡文には数多くの「〇復」の語が用いられている．とりわけ，王羲之[(9)]の用例数は同時代の文献のなかでとくに際立っており，その種類も以下のとおり，かなり多彩である．

「当復」9例，「亦復」4例，「行復」4例，「尋復」3例，「豈復」3例，「故復」3例，「便復」3例，「比復」3例，「今復」3例，「乃復」2例，「或復」2例，「転復」2例，「近復」2例，「方復」2例，「然復」1例，「頃復」1例，「若復」1例，「適復」1例，「又復」1例．

これらの用例を見ると，すでに漢代に用いられていたものもあるが，また新しく見えるものもあり，この時代（東晋時代）に「復」の接尾辞化がいっそう活発化したことが知られよう．

しかし，そうした一方で，同じ作者による「蘭亭集序」，「用筆賦」，「与会稽王箋」，「遊四郡記」，「為会稽内史，称疾去郡，於父墓前自誓文」などの作品を見ると，「復」を後置成分とする「○復」の語はほとんどまったく見られない（わずかに「書論」に「時復」の語が見える）．

とすれば，これは作者や時代による相違ではなく，文体間における相違と見るのが自然であろう．つまり，接尾辞「復」はきわめて口語的色彩の強い文献のなかに多用されており，これは当時の口語が直接反映されたものと判断されるわけである．

だが，これらの用例は口語が反映したものであるだけに，方言的な要素が多分に作用している可能性も考えられる．そこで次に，北方言語と南方言語における異同を確認しておきたい．

4.2　地域的な差異

王羲之の「雑帖」や『世説新語』といった作品は，いわゆる南朝の言語体系を体現するものであるが，北朝の言語を反映する書物において接尾辞「復」はどのように使用されているのであろうか．ここでは，ひとまず北魏末の楊衒之の手になる『洛陽伽藍記』を例にとって，その使用状況を見てみよう．

『洛陽伽藍記』には，全７例の「○復」の語が用いられている．

○隧門一時閉，幽庭豈復光．　（巻１，永寧寺）
○雖復苗莠自口，未宜栄辱也．　（巻２，泰太上君寺）
○雖復秦餘漢罪，雑以華言．　（巻２，景寧寺）
○時復遊行，或遇飯食．　（巻３，菩提寺）
○帝至熟時，常詣取之，或復賜宮人．　（巻４，白馬寺）

○略従容閑雅，本自天資，出南入北，転復高邁言論動止．（巻4，追光寺）
○由是発心者，亦復無量．（巻4，永明寺）

これらを一瞥して分かることは，絶対量の少なさとともに，そのヴァリエイションの乏しさである．七つの用例のうち，「豈復」「亦復」はすでに漢代の詩に見られたものであり，「雖復」は重複して用いられているので，結局新しい種類は「時復」「或復」「亦復」「雖復」の四種となる．

そしてこうした傾向は，時代が下って，初唐の張鷟（深州陸沢の人）の手になる口語資料，『遊仙窟』ともほぼ重なるものである．

○雖復贈蘭解珮，未甚関懐．
○時復偸眼看，十娘欲似不快．
○不覚転眼，時復偸看十娘．
○囲碁出於智慧，張郎亦復太能．
○今見武功，又復子南夫也．
○昔日曾経自弄他，今朝並復従人弄．
○裁為八幅被，時復一相思．
○若因行李，時復相過．

ここにおいても，「時復」「亦復」「雖復」「又復」「並復」といった，わずか五種類の「○復」の語しか用いられていない．しかも，「時復」「亦復」「雖復」の三種は，『洛陽伽藍記』と同じものであることは注意されてよい．

つまり，接尾辞「復」は，北方言語のなかでもたしかに存在したが，その用例は画一的・定型的であり，南方言語のような著しい発展はとげなかったと言えるわけである．そして，これは接尾辞化の現象が方言によって著しい差異を示すことの一つの実例として位置づけることができよう．

5. 結　語

以上，中古漢語の接尾辞「復」をめぐって，その形成過程と使用状況の二点について考察してきた．ここで改めてその論点を整理すれば，ほぼ次のようになろう．

①接尾辞「復」は，「二つの動作・事柄の接続」を示す語につくというまとまりにおいてとらえられるが，それは副詞「復」が本来的に「行為・事柄の累加・反復・継続」といった，広い意味での接続関係を示す機能をもっていたことと関連する．

②また，「復」字には別に，状態・動作の程度を強調する用法があり，この「状態の程度を表す」という意味を紐帯として，魏晋南北朝時代に「誠復」「頗復」「甚復」といった複合語が増産されていった可能性が高い．

③現存する資料に即して言う限り，「復」が接尾辞化するのは，おそくとも後漢末のことと考えられ，しかも初めは主として民間歌謡のなかで用いられていた．

④接尾辞「復」をともなう語は，広い範囲で見られるが，正統的な文言文よりも，むしろ通俗的な散文のなかで多用されており，これは当時の口語の反映である，と見なされる．

⑤また地域性という点から見ると，北方言語における用例が南方言語に比べて乏しく，かつ画一的であることから，方言的色彩の強い語であったことが推察される．

最後に一つ注意されてよいのは，この接尾辞の機能である．一般に「復」字は，「音節を拡充する役割を果たすだけで，特に意味はない」とされるが，必ずしもそうとは言い難い．

ここではひとまず，筆者の気づいた点を一つ指摘しておきたい．それは，詞性を安定させる機能である．

たとえば，「故」字には，副詞（「もともと」「わざと」「まことに」「なお」），連詞（「ゆえに」），形容詞（「もとの」），名詞（「理由」「事柄」）といった多彩な用法があるが，『世説新語』のなかで，「故復」は，いずれも副詞として用いられている．

礼畢，酒酣，帝曰：「卿故復憶竹馬之好不？」

（挨拶が終わり，酒がまわると，武帝は言った．「きみはいまでも竹馬の友情をおぼえているだろうか？」と．）　（「方正」10）

宣武語人曰：「朝廷間故復有此賢．」

（宣武侯桓温は言った．「朝廷のなかにも本来こんな立派な人がいたのだな」と．）　（「雅量」25）

つまり，「故」のような多義的な語が接尾化することによって，語の詞性がある程度安定し，一つの独立した語として用いられやすくなるわけである．

こうして見ると，「復」はたんに副詞の接尾辞で，意味のない記号に近い，という言語感覚ではなかったことが知られよう．もっとも，この点については，さらに広範囲にわたって数多くの用例を収集し，再検討する必要があるように思われる．

〔注〕

(1) 梁暁虹 1994，174 頁参照．また，梁暁虹 1991「漢魏六朝訳経対漢語詞彙双音化的影響」『南京師範大学学報』2 期では，この二音節語の増加現象が，仏典の翻訳と関係があることを指摘している．

(2) 本稿では，祝鴻傑 1991 に従い，「接尾辞」の定義を以下のように規定する．①直接事物を表さない．②複合語のなかでの意味では独立して一つの語となることができず，詞根に付いて，ある種の付加的意義を表したり，詞類を表すメルクマールとなる．③語の構造においてつねに位置が固定している．

なお，蔣紹愚 1980，蔣紹愚 1990，王鋏・曽明徳 1991 では「復」を「語助詞」とし，朱慶之 1992 では「自由構詞語素」と見なしている．

(3) 副詞の接尾辞としては，他に「地，底，生，他，你，来，経，自」などがある．このうち「自」の用法は，「復」ときわめて近接しており，両者はあわせて論じられることが多い．接尾辞「自」に関する専論としては以下のものがある．蔣紹愚 1980「杜詩詞語札記」『語言学論叢』第 6 輯，劉瑞明 1989「詞尾“自”類説」『語文研究』4 期，白振有・蔣宗許 1990「詞尾“自”臆説」『延安大学学報』4 期，蔣宗許 1992「詞尾“自”再説」『古漢語研究』3 期．なお，森野繁夫 1976「六朝訳経の語彙」『広島大学文学部紀要』，王鋏 1986『詩詞曲語辞例釈(増訂本)』中華書局，蔣紹愚 1990『唐詩語言研究』などでも「自」の接尾辞的用法に論及している．

(4) 「復」を接尾辞と見なすものは以下のとおり．劉瑞明 1987，劉瑞明 1989，蔣宗許 1990，蔣宗許 1991，李明孝 1992，蔣宗許 1994．なお姚振武 1993 は「○復」の語を同義複詞，もしくは「復」の単用と主張する．

(5) 柳士鎮 1992，237 頁．

(6) 劉瑞明 1989 などでは，「不復」「無復」「非復」「勿復」といった「否定詞＋復」の形式も接尾辞「復」の用例と見なしているが，否定詞に後置される「復」については，否定の強調と見る向きもあり，ここではひとまず，その用例から除外しておく．

なお柳士鎮 1992 では，「君復何姓？」の句を例にあげ，この「復」が副詞でも接尾辞でもなく，ただ音節を調整するだけの役割を果たす助詞と見なすが，疑問詞「何」に前置される「復」は，「又」と同じく疑問・反語の語気を強調するもので，明らかに副詞の用法である．

(7) 朱慶之 1992，148 頁参照．

(8) 逯欽立『先秦漢魏晋南北朝詩』337 頁では，この詩の内容，用語，修辞等の点から見て，後漢末の文士の作であろう，と言う．

(9) 王羲之の「雑帖」は，『法書要録』，『淳化閣帖』，『二王帖評釈』に収められている．ここでは，森野繁夫・佐藤利行著『王羲之全書翰』(増補改訂版) に依った．

〔参考文献〕

劉淇『助字辨略』1954 年，中華書局．

蔣紹愚 1980「唐詩詞語札記」．『北京大学学報』3 期．

蔣紹愚 1990『唐詩語言研究』中州古籍出版社．

劉瑞明 1987「助詞“復”続説」．『語言研究』2 期．

劉瑞明 1989「『世説新語』中的詞尾“自”和“復”」.『中国語文』3 期.
蔣宗許 1990「也談詞尾“復”」.『中国語文』4 期.
蔣宗許 1991「詞尾“復”浅論」.『菏沢師範学報』1 期.
李明孝 1992「詞尾“復”,“自”例補」.『語文教学与研究』10 期.
姚振武 1993「関於中古漢語的“自”和“復”」.『中国語文』2 期.
蔣宗許 1994「再説詞尾“自”和“復”」.『中国語文』6 期.
祝鴻傑 1991「漢語詞綴研究管見」.『語言研究』2 期.
江藍生 1988『魏晋南北朝小説詞語彙釈』語文出版社.
王鍈・曽明徳 1991『詩詞曲語辞集釈』語文出版社.
柳士鎮 1992『魏晋南北朝歴史語法』南京大学出版社. 第 17 章　副詞　第 3 節　結合成詞的双音節副詞.
朱慶之 1992『仏典与中古漢語詞彙研究』文津出版社. 第 3 章第 4 節　中古漢語詞彙特殊構詞語素釈例之二——虚語素.
梁暁虹 1994『仏教詞語的構造与漢語詞彙的発展』北京語言学院出版社.
張永言 1992『世説新語辞典』四川人民出版社.
張万起 1993『世説新語詞典』商務印書館.
張振徳・宋子然 1995『世説新語語言研究』巴蜀書社.
志村良治 1984『中国中世語法史研究』三冬社.
楊伯峻・何楽士 1992『古漢語語法及其発展』語文出版社.

〔**参照テキスト**〕
『十三経注疏』1979, 中華書局.
『先秦漢魏晋南北朝詩』逯欽立輯校, 1983, 中華書局.
『全上古三代秦漢三国六朝文』嚴可均輯校, 1958, 中華書局.
『世説新語箋疏』余嘉錫著, 1993, 修訂本, 上海古籍出版社.
『王羲之全書翰』(増補改訂版) 森野繁夫・佐藤利行著, 1996, 白帝社.
『文選索引』斯波六郎編, 1975, 正中書局.
『洛陽伽藍記』(『増訂漢魏叢書』4, 大化書局所収).
『遊仙窟』漆山又四郎訳注, 1949, 岩波文庫.